卒業論文

都市化する自治体における里山保全の社会学的考察

2014 年度入学

九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

2018 年 1 月提出

要　約

本論文は、福岡県筑紫郡那珂川町の南部に位置する南畑地域と、そこでおこなわれている地域おこし活動を調査したものである。

那珂川町は 2018 年 10 月の単独市制施行を予定している人口増加自治体である。市制施行を前に、開発による都市化が進められている町内において、人口減少を問題視して地域おこし活動に取り組む地域があるということに着目した。南畑地域の住民が、周囲で起こっている都市化の動きに同調することを選択せず、自然と共生できるその自然環境をアピールする地域おこし活動に取り組んでいる理由は何か。この疑問を出発点として、南畑地域へのフィールドワークや関係者への聞き取り調査をおこなった。

地域おこし活動関係者 8 人に聞き取り調査を実施した結果、南畑地域の「里山」という新たな側面を知る。南畑地域の住民はその里山環境に強い誇りと責任感をもっており、開発による都市化を選択しなかった理由もそこにあった。地域に入って調査をおこなったことで、南畑地域は単なる過疎地域ではなく里山地域であること、地域住民は里山環境を保全しながら地域の人口を増やしたいと考えていることが判明した。

そこで、里山保全と人口増加という矛盾しうる二つの願いの両立を目指すことを本論文の第二課題として、里山に関する文献調査をおこなった。

まず、文献調査をとおして里山保全の重要性を明らかにしたうえで、藻谷浩介・NHK 広島取材班によってあらわされた『里山資本主義――日本経済は「安心の原理」で動く』を先行研究として、里山の「可能性」を考察した。本著にて紹介される先行事例をもとに、里山における開発と環境保全の両立がどのようにおこなわれているかを調査した。そこでは、環境を破壊するような従来の開発ではなく、里山の環境を活用した「新たな開発」がおこなわれていた。里山の保全と開発は両立しうるということを確認して、次に南畑地域の可能性の考察に移った。

南畑地域では、地域の環境を守ることを最優先しているために、はじめから開発を拒否する姿勢で地域おこし活動がおこなわれてきた。しかし、南畑地域の環境を活用した、南畑地域独自の「新たな開発」も可能性のひとつとして一考の価値がある。また、地域として独立・自立しようとしている南畑地域だが、人口 50,000 人の町を地域のアピールポイントとして活用することも一手段である。

最後に、約半年間のフィールドワークをとおして南畑地域を調査してきた学生という立

場から、里山という南畑地域の魅力をアピールすること、そして滞在・交流人口を増やすことを目的とする「里山留学」の提案をする。

里山留学とは、都会で過ごす子どもを南畑地域の民家で受け入れ、里山での暮らしを体験してもらうプログラムである。南畑地域の地域課題のひとつが、南畑小学校の児童数の減少であるため、一時的にでも南畑小学校に児童が増えること、地域内外の子どもたちに交流の場をもたらすことを期待した。また、今後世界的に省エネルギー化が推奨されていったとき、その未来を担う子どもたちに幼いうちから里山的生活への理解をもってもらうことにもつながる。移住希望者を多く受け入れることができる体制が整うまでの二の矢として、滞在・交流人口の増加と里山南畑を多くの人に知ってもらうことが目標だ。南畑地域への具体的な提案を調査の成果として、本論文を締めくくるものである。

目　次

1　都市化と過疎化のパラドックス 1

1.1　市制施行を控えた那珂川町 1

1.2　人口減少を憂慮する南畑地域 5

1.3　問題の所在 7

2　地域おこし活動のあゆみ 8

2.1　地域活性化の取り組み 8

2.2　南畑ぼうぶら会議 10

2.3　ぼうぶら会員が語る現状 15

3　住民はどこを目指すのか 18

3.1　聞き取り調査の概要と目的 18

3.2　調査結果 19

3.2.1　新規就農者 C 氏

3.2.2　ジュエリー作家 E 氏

3.2.3　ガラス工芸家 F 氏

3.2.4　移住事業者 G 氏・H 氏

3.3　里山としての南畑地域 28

4　里山における地域活性化 33

4.1　里山の定義と役割 33

4.2　里山資本主義に学ぶ 36

4.3　南畑地域と里山資本主義 39

5　子どもの里山留学 43

5.1　里山留学とは 43

5.2　提案の背景 44

5.3　数字にあらわれない人口 46

おわりに 48

[文献] 49